

本当のサステナビリティってなんだろう？

広島県立加計高等学校 2年 久保 日向太

「俺、農家になるわ」それは、あまりにも突然の出来事だった。私の父親は25年近く教壇に立って小学生に色々なことを教えていた。趣味は釣りに将棋、パスタと炊き込みご飯を作るのがめちゃくちゃうまい。そんな父親が急に農家になると言い始めたのだ。確かに私の母方の祖父は、お米を作っている農家だし、「後継ぎがないから辞めよっかなあ」とはチラホラ呟いてはいた。しかし、あの教師一筋の父親が急に「学校でやりたいことはやり尽くした！」とか言って辞めたのは、私にとってあまりにも衝撃的な出来事だった。

そんな父親が継ぐ予定の祖父の田んぼには、稲刈りの季節がもうすぐやってくる。小学生の頃は、祖父の膝の上でコンバインを操縦するのが楽しみで仕方がなかったし、お米を収穫している祖父の後ろ姿は10年経った今でも私のひそかな自慢の一つだ。そんな祖父の田んぼの近くでは、ここ数年の間に不相応な真っ黒いパネルを見かけるようになってきた。少子高齢化や後継者不足、そういった農村地域が抱える問題が、日当たりが良い大きな土地を必要とする太陽光発電と上手くかみ合ってしまった為だろう。

近年「SDGs」の名のもとに、大量の風力や太陽光発電が作られ、日本政府が掲げる2050年カーボンニュートラルが現実味を帯びてきている。しかし、その輝かしい功績の裏側では、日本の伝統的な田畑が黒いソーラーパネルに変わり、稲を育む水を形成する山々には大きなプロペラが立ち並ぶようになった。不自然なほどに切り崩された山を皆さんも一度は車から目にしたことがあるだろう。私がかつてザリガニ釣りをしていた実家の近くでも、ソーラーパネルの真下でお米を栽培している摩訶不思議な光景がみられるようになった。地球温暖化や海洋酸性化、干ばつに紛争、そして貧困。数えきれないほどの社会問題が混在している今の地球で、私たちの世代がより真摯にこれらの問題と向き合わなければいけないのは当たり前のことだろう。しかし、それと同時に「SDGs」という大義名分に踊らされ、私たちが古来より受け継いできた伝統的な景観を考えなしに破壊することは決してあってはならないことだと私は思う。後数か月すれば農家の息子になり、田畑という存在がより身近になりつつある今年。改めて私たちが目指す「エコ」や「SDGs」の形を考えるようになった。

夕暮れ時に虫網を片手に田んぼにいき、トンボやザリガニを捕まえていたあの時のような、人としての豊かさを後世に残すのか、それともカーボンニュートラルの為に太陽光発電を優先するのか。正解はどちらか一つではないと思う。片方を疎かにして達成した目標は、決して「持続可能な社会」とは呼べないだろうし、新たな問題を生み出すきっかけになりかねないだろう。例えば、私たちが環境の為に設置する太陽光パネルは、本当に持続可能なのだろうか？製造過程での強制労働から目をそらしていないだろうか。レジ袋の代用のマイバッグを5個も6個も持つことは環境にやさしいのだろうか？雑誌のキャンペーンやイベントの度に手に入れた使わないマイバッグが沢山家に眠ってはいないだろうか。良かれと思って寄付をした古着が、現地の服飾産業を破壊してはいないだろうか。こうした片方からみれば良いことも一歩踏み込んだその先に沢山の問題を孕んでいることはあまり知られていない。

「SDGs」という言葉が爆発的に広がった今、どちらか一方を妄信的に優先するのではなく、互いの主張の着地点を模索し貧困問題や環境問題、そして「SDGs」と正しく向き合うことが必要だと思う。本当の意味での持続可能な社会を築くためにまずは、昼間はカーテンを開け、クーラーの温度を一度だけあげてみる。こういった身近な生活の中に沢山ある「ちょっと地球に優しい行動」を心がけるようにしていきたい。